

マルティネルの街角で

YKI 国際特許事務所 弁理士◇葦原 エミ

Vol.13 People in “IP”

某南国の超リゾートでこの原稿を書いている。バルコニーから見えるビーチからの波の音で目を覚ます。ハイビスカスが咲き乱れ、鳥のさえずりが心地良い。

これぞ、バカンスっっ！

じゃなくって、実は、世界中の人が集まる立派な国際会議に参加中なのです（いや、ほんとだって！）。

知財の世界は「属地主義」が原則で、法域ごとに権利化しなければならない。が、それは法律上の話で、守りたいと思うブランドは軽々と国境を越え、世界に羽ばたいていく。

国内での権利化を代理するだけでなく、この「軽々と国境を越える」手助けをするのも代理人の役割だ。故に、筆者は海外に行つて人に会う。

セミナーやワークショップで、あーでもない、こーでもないと商標法だの不競法だの著作権法だのといった話に侃侃諤諤^{かんかんがくがく}、議論したりもすれば、アポを取ってフレンドリーにミーティングもする。が、そういう「決まり切った」行動でないとところから実は、面白い世界が展開する。

「エレベーターピッチ」というビジネス用語がある。エレベーターで出会った人に、目的階に着くまでの30秒で、ビジネスプランを説明して投資家の心を掴むことをいう。経験則上、国際会議でのエレベーターピッチは幸運を呼ぶ。

「It was a nice seminar, wasn't it?」「Yah!」「I'm Emi from Japan!」「Oh, hi! I'm Thomas」

みたいな自己紹介で、ロビー階にたどり着くまでの間に意気投合し、ディナーの約束ができちゃった、なんてことも珍しくない。で、驚くことに、その直後には一緒に仕事をしていたりするから、結構馬鹿にならない。

こうした気軽さ、積極さ、チャンスを一瞬たりとも逃せないところは、弁理士でも他の職業でも変わらないとは思ふ。でも、大切なクライアント案件を海外で「代理」する人となぐことを考えると、弁理士が海外で人に会う意味は重い。

「我々が守らなければならないのがIP。さて、IPって何?」

これには複数の回答が考えられる。Intellectual property が通常のIPだろうけど、Industrial property という回答もあり得る。

「いやいや、それだけではありません(ニコリ)」と、筆者をこの業界に導いてくれた恩師は言った。

戦争で父親を失い、母親が女手一つで自分たち兄妹を育ててくれたという経験を持つその人は、「世界中に友人がいる」と豪語していた。ほんとに友人かどうかはさて置き、一度会えばその人にとっては「友人」で、実際、友人と呼んでいいんだろうな、というくらい、いろんな国の人たちが彼に会いにきていた。

「弁理士とは世界中の人と仕事をする職業です。こうして友達になった人とは、戦争になってもお互いに銃は向けられない。そういう仕事」とその人は言う。

この言葉は重く、でも、しっかりと心に残った。筆者は海外と仕事をするときはいつも「銃を向けない関係」をつくっているのだ、と思う。

で、さっきの「IPって何だ?」の質問に彼はこう答えた。

「International peaceを私はいつも求め、守っていきたい。Intellectual propertyを通じてInternational peaceを実現していくのが私のやりたいことです」

新年にあたり、筆者が求める自分の役割と、そして、世界の平和を願う気持ちを再認識したいと思うのでした。

